

袂 別 の 賦 (2) — Byron

楠 本 哲 夫

‘Darkness’は最初‘A Dream’と呼ばれた。 Geneva に Byron が 居住した 1816. 7月の作である。

Jeffrey の注釈によって この詩が どのように 当時の意見として うけとられたかの 要約として かつ 証據として役立つであろう。

“Darkness は 太陽と天体の最終的消滅を想定しての結末を 壮大に、冥く描いた詩である。 たしかに 偉大な おそろべき迫力をもって せまりくる。だが もろもろの出来事を 多分に鼓張し 幻想的に解決している。

その‘構想’そのものが まさに terrible 凄絶で 就中、既知の大惨禍の構想は すさまじく 想像力にあまりにもうっとうしく迫りきて 到底 たのしく冥想し得ない、たとへかすかに 詩情を投影しても なお。”

と Edinburgh Review xxvii, Feb, 1817 に Jeffery は この詩を批評している。

Sir Walter Scott — Byron の最も良き理解者の一人——は この詩を批評して

‘あいまいな点あり 激情的。 Byron がはてしない宇宙にあまりにも想像をかけたことの浪費ゆえに この種のテーマが ややもすれば ちんぷなものに おちいり易い、正確さへの無視ゆえに 詩情の点で 神秘主義を宗教と対

比させている。’と述べている。

さらに, Bernerd Blackstone は云う。

‘だが、事實は、この詩そのものには、不分明な、激情的なところは全くな
く、詩形をとった一つの科学的虚構なので（最後の人類の主題は 当代の作家
の多くの関心をひいた）この主題の恐怖をさらに強くしている、冷静なまでに
正確な陳述をなされている。

‘この詩は もちろん はるかに ^{ながえうま} 轅馬 以上のものである。周期的 時の、
永世にわたる一時期の終末の提示であり、‘形なき、虚空なき’ ^{とんとん} 混沌の顕示で
あり（Byron は これを後年の作品 Cain の中にも 示している）新しい
acon（永世）が再開するまでの間隙である’

‘The Ancient Mariner’ も Southey によって ‘a Dutch attempt at German
sublimity’ として 注目されたことを 想起するのは、興味深い。

‘Darkness’ の 冒頭の数行は、その要旨をのべている。

I had a dream, which was not all a dream.
The bright sun was extinguished, and the stars
Did wander darkling in the eternal space
Rayless, and pathless, and the icy Earth
Swung blind and blackening in the moonless air;
Morn came and went—and came, and brought no day,
And men forgot their passions in the dread
Of this their desolation; and all hearts
Were chill'd into a selfish prayer for light:

And they did live by watch-fires—and the thrones,
The palaces of crowned kings—the huts,
The habitations of all things which dwell,
Were burnt for beacons....

ぼくは夢を見た 全くの夢ではなかった
輝く太陽が消滅して そして星も
もうろうとして 永遠の宇宙を彷徨^{さまよ}った
光なく 道^{みち}なく そして冷えきった地上も
盲^{めし}いて揺れ 月なき空に 暗かった
朝がきて去り——そして又やってくるが晝はこなかった
そしてひとびとは 諸の感情を忘れた
その恐怖の心細さの中に。そして凡ての心は
うすら寒く とり膚^{はだ}たち 光りを求める利己的祈へと変った
そして彼らは かがり火のそばで 暮した——そして玉座も
王冠を戴く王たちの 宮殿も——あばらやも
生きとし生けるものの すみ家も
かがり火のために 焼き拂はれてしまった (試訳)

この詩の手法は いちじるしく安定し 感情を抑えている。構想はなく 感情的発展もあまりない。 もっとも 主人の死体を看守^{みまも}る犬の忠誠は バイロンの ペーソスを ちらりと見せては いるけれども。

そしてまた 1816. 7月づけで もう一つの無韻詩 ‘The Dream’—— Mary Chaworth への Byron の悲恋の追悼——と そして同時に 叙情詩 Tintern Abbey —— 温い理想主義から、荒びゆき絶望へと駆り立てられゆく Byron 自身の内的心の発展をうたった——との 二篇をかいている。

後者は Darkness よりも長篇で より親しめる 興味ある詩である。

冒頭の部分は Byron 自身の心の深奥、さらに眠りと 目覚めの関係、さらに その両者について 創造的技法で 探りあてようと試みている。

この詩の 秀れた明るさと柔軟性は 注目に値する。これは B 自身の語る ことでもある。

Our life is twofold: Sleep hath its own world,
A boundary between the things misnamed
Death and existence: Sleep hath its own world,
And a wide realm of wild reality....

われわれの生は 二重性をもつ
眠りは その独自の世界をもち
死と生と 誤称されたものの間の
境界をなし
眠りは その独自の世界をもち
そして 荒き現実の
びようびよう 渺 渺とした
領域なのだ

(試訳)

夢のもつ もろもろの性格について述べている。

....they speak
Like Sibyls, of the future; they have power—
The tyranny of pleasure and of pain;
They make us what we were not—what they will,
And shake us with the vision that's gone by,

The dread of vanished shadows

(11-17)

……夢は語る

Sibyls のように 未来について。

夢には 力がある——

快樂と苦痛の 暴虐

夢は 過去のわれわれになかったもの

——その欲するものを つくり

過ぎ去った幻影で

われわれを 揺さぶり

消え去った影の恐怖で

われわれを 揺さぶる

(試訳)

そのような一つの夢が この詩ののこりの部分をも占めている。 Section ii
の中で 痛ましい告白的音楽が始まる。

I saw two beings in the hues of youth

Standing upon a hill, a gentle hill,

Green and of mild declivity....

——the hill

Was crowned with a peculiar diadem

Of trees, in circular array, so fixed,

Not by the sport of nature, but of man....

The Maid was on the eve of Womanhood;

The boy had fewer summers, but his heart

Had far outgrown his years, and to his eye

There was but one beloved face on earth,

And that was shining on him.

(iv. 27-49)

わたしは見た 二人の人間が 若者の姿で立っているのを
丘の上に しづかな丘の上に
みどりの そして なだらかな下り坂の……

——その丘は

円形の、しっかり固定された、独得な、緑樹の冠をつけ
それは、自然でなく、人為のたくみのなせるわざ。
少女は女人の世界の門口に立ち
少年はより年下、だが、彼の心は
その年齢よりはずっと円熟していた、そして 彼のみつめる
この世で愛する顔は 只一つだけ
そしてその顔が彼を照らしていた

(iv. 27-49) (試訳)

ここで、明らかに、われわれは、さらに、Byron の結婚という、あの屈辱的挫折から、Augusta を超えて、いま、Byron の少年時代の夢と希望へと帰ってゆくのである。

しかし その少年 Byron の夢も希望も、くだけ散り、屈辱と挫折の傷手を深々とうけるのである。

Harrow 校において、高原の仔馬 colt として、そして 英雄的存在として畏敬の念をもって観られた、崇められた少年 Byron ははつらつとして、光り耀うばかりの 幸福な生活をエンジョイしていたとき、はからずも隣家にすむ、美しい蠱惑的 Mary Chaworth に 熱烈な恋をする。すべてを捧げたい Byron の生涯での、ただ一度の、熱烈な恋をする。プラトニックな恋であった。Mary Chaworth が この世での、唯一人の、生涯を友としてよい、妻としてよい と思へたほどの、理想の女性として、少年 Byron の目には、心には、くっきりと鮮明に やきついてしまったのである。少年 Byron よりは年上の、美しい女性 Mary Chaworth であった。

Chaworth も、cute な、noble な、色白な、英知と憂愁をたたえた、機智に富む、はつらつとした、貴品をたたえた少年 Byron の美貌を 憎からず思った。そして弟の如く愛した。Mary Chaworth は 嫁ぎゆく前の身であった。心境だった。

～とある日、house maid から、Byron へ寄せる心境をきかれたとき、ふと不用意にもらした Chaworth のことば

“あのような びっこの少年に わたしが ちょっとでも 関心をよせる と思って？”

と話すのを もれきいたとき……

少年 Byron の心は、まさに その、ひと言はこれ以上の衝撃はないほどの、脳天に打ち下ろされた 鉄槌の一撃だったのである。

Byron は その後、一学期間、ハロー校を休学して 故郷に帰り 野山をかけめぐり、傷心を癒やさねばならなかった。多感な少年 Byron の 傷心は深かった。

かくて Byron の女性観はそのとき すでに決ってしまった—— あらゆる美しい女性への敵視、報復、征服心、が、この時期において Byron の終生の女性観として、すでに確立したといっても過言ではないほどに決定的なものとなってしまったほどの、失恋の傷手として、それは 少年 Byron の心に 鮮烈に 焼きついてしまった。大きな衝撃的経験だったのである。

‘The Dream’ の最初の title が ‘The Destiny’ となっているのを知るときそれは当然 うなづける ことで、それは——

Byron の生涯の Destiny 運命、つまり挫折の運命—— びっこの少年としての出生、育い立ち から Missolonghi での悲喜劇的終幕までの—— を背負

った‘兇運の星の子’ Byron としての心境を 訴へたかった、詩人の心情の吐露された唄 である。

Time taught him a deep answer——when she loved
Another; even *now* she loved another,
And on the summint of that hill she stood
Looking afar if yet her lover's steed
Kept pace with her expectancy, and flew. (ii. 70-4)

時が少年に 深い答を与へた—— 少女が愛を
別人にむけたとき；今も彼女は別人を愛した
そして少女は丘の頂上に立ち
はるかかなたを見て 恋人の馬が
彼女の期待と歩調を合せているかどうかをたしかめ
それから駆けて去っていった (試訳)

Byron の 無韻詩中 これが最高傑作である。 この最後の二行は ダンテ
風のむき出しの身^み震^{ふる}いを覚えさせる

この後の短い7節は Byron の生涯の段階を この主な永久的結果をのこす
衝撃に根ざした情緒的ドラマとしてたどりゆく。いはば一人の Oresteia が
王朝のことばから 一身上のことばへと もどってゆく

Section iv は 彼を‘荒野の放浪者’として述べている。 燃える思潮の、
荒野の放浪者として その陽光を 飲み乾した と述べている。

——and in the last he lay....

Couched among fallen columns, in the shade

Of ruin'd walls that had survived the names
Of those who rear'd them.

(iv. 114-18)

……そしてその最後の中に彼は横わった
倒れた柱の間に身を横たえて。それらを育てた
人々の名前よりも さらに生き残った
廃虚の壁の影の中に

(試訳)

Section vi の中で Byron は 彼の結婚について ちょっと 触れている。

The Wanderer was returned. —I saw him stand
Before an Altar—with a gentle bride;
Her face was fair, but was not that which made
The Starlight of his Boyhood.

(vi. 145-9) (試訳)

放浪者は帰ってきた——私は彼が祭壇の前に
立っているのを見た——ものしづかな花嫁と。
花嫁の顔は美しかった、だが、彼の少年の日の
星明りを彩った、その美しさとはちがっていた。

Sectin viii の中では 彼は ‘従来 of 如く孤独’ である。

The beings which surrounded him were gone,
Or were at war with him; he was a mark
For blight and desolation, compassed round
With Hatred and Contention; Pain was mixed
In all which was served up to him, until,
Like to the Pontic monarch of old days,

He fed on poisons, and they had no power,
 But were a kind of nutriment; he lived
 Through that which had been death to many men,
 And made him friends of mountains: with the stars
 And the quick Spirit of the Universe
 He held his dialogues; and they did teach
 To him the magic of their mysteries;
 To him the book of Night was opened wide,
 And voices from the deep abyss revealed
 A marvel and a secret—Be it so. (viii. 186-201)

彼をとりまいた人人は 去っていった
 あるいは彼に戦を挑んだ。彼は標的となった。
 胴枯病の、そして荒廢の。憎惡と争論の渦に^{うず}
 とり囲まれて。 苦痛は
 彼に仕へたすべてのものの中に混入し、終に
 昔の時代のポンティク君主に対するように
 彼は毒を喰って生きた、だがその毒には力なく
 ある種の栄養が^{あた}与へられた；そして彼は生きた
 多くの人にとって死となったものの中をくぐりぬけ、
 そして彼は山を友とした。そして星と、
 そして宇宙のすばしこい精霊と
 彼は対話を交した；そしてそれらが教へた
 彼にむかって 彼らの神秘なる魔法を。
 彼にむかって夜の書物が ぱっと開かれた。
 そして深淵からのこえが^{あきらか} 顕にした
 不可思議と神秘を——そのあるがまま。 (試訳)

既に、ここで、あの Margus、—— 罪と苦しみを通して 宇宙の神秘, the book of Night を探ろうとする魔法使い, the Anima Mundi が 出現してきて、彼が Manfred 及び その他の 形而上学的劇を支配するのである。

(続 次号)

参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford, Byron: Hutchison.
- 2) Ernest Hartley Colerige, The Poetical Works of Lord Byron: Lewis Prints.
- 3) Leslie A. Marchland, Byron's Poetry: John Murray.
- 4) Bernard Blackstone, Byron: Longman.
- 5) John D. Jump, Byron: Routledge & Kegan Paul.
- 6) Lafcadio Hearn, The English Romantic Poets: 北星堂.